

## 青年期・成人期の『働く場』

知的障害のある人の青年期・成人期は、私たちと同じように、「働く場」と「暮らしの場」「趣味・余暇の場」の主に3つの場によって成り立っています。

知的障害のある人は、会社や地域の福祉施設・作業所などで、それぞれの得意なところを生かしながら、支援を受けて働いています。

会社では、全社員（常用雇用をしている人）の1.8%以上は、障害のある人を雇用するよう法律で決められています。

近年、製造業から流通・販売・サービス業まで、知的障害のある人たちが幅広い分野で働くようになりました。また、接客サービスや介護補助・保育補助・事務補助などの新しい職域での活躍も見られるようになりました。

最近では、障害のある人が会社で働きやすいよう、さまざまな新しい制度とともに、地域に支援センターができてきました。

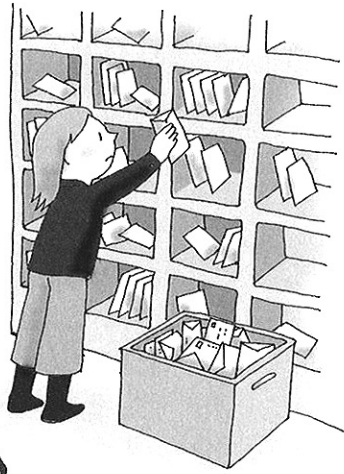
就職前後に、いっしょに働きながら仕事や職業生活を教えてくれる「ジョブコーチ」を利用したり、会社等の実際の職場で職業訓練を受けてから、就職を目指す方々が増えてきました。

また、知的障害のある方にもわかりやすい表示や指示書等を工夫することで、安定して働くことができることもわかってきました。皆さんの地域でも、知的障害のある方が働ける職場をぜひ広げてください。

保育園で働く



メールの仕分け



厨房で働く



ウェイトレス

パソコンのデータ入力



商品を並べる

ジョブコーサ

就業・生活支援センター

# コラム

## 「作業所って何？」

障害のあるなしにかかわらず、青年期・成人期に、「働く生活」を中心に、社会の一員として人の役に立つことは、とても大切なことです。

「働く生活」を通して、社会の中での役割を意識できますし、知的障害のある人たちも、多様な経験を積むことで、職業上の発達をすることが知られています。

地域にある作業所は、こうした考えをもとに、障害のある方の保護者や家族が中心となってつくられてきました。多くは定員が20名未満の小さな作業所です。

そこでの仕事は、ショッピングバッグの製造や雑誌の付録づくり等、会社からの内職が中心でした。最近では、利用者一人ひとりに合わせて、支援方法や補助具等を工夫し、地域の産業とつながりのある生産品や、利用者の特技を生かした自主製品の製造・販売をすることが多くなりました。

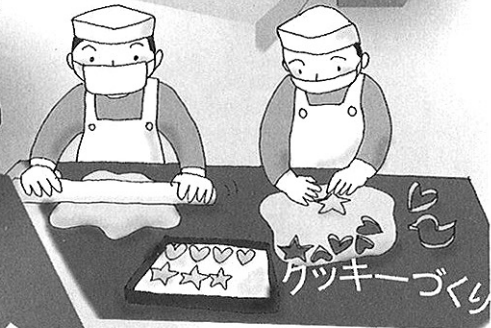
障害があってもみな、地域の中で働き、社会の役に立つことを望んでいます。作業所などの働く場は、地域の皆さんによるボランティアや仕事の受注・請負等によって支えられています。

しかし、作業所や施設で働く方々の給料は、現在1カ月5千円から1万円程度がほとんどです。地域にある作業所や施設を訪れてみてください。皆さんの力を必要としています。

文字が読めなくても、  
 数が数えられなくても、  
 手順が覚えられなくても、  
 一人でできる、工夫がいっぱい!



袋づめ



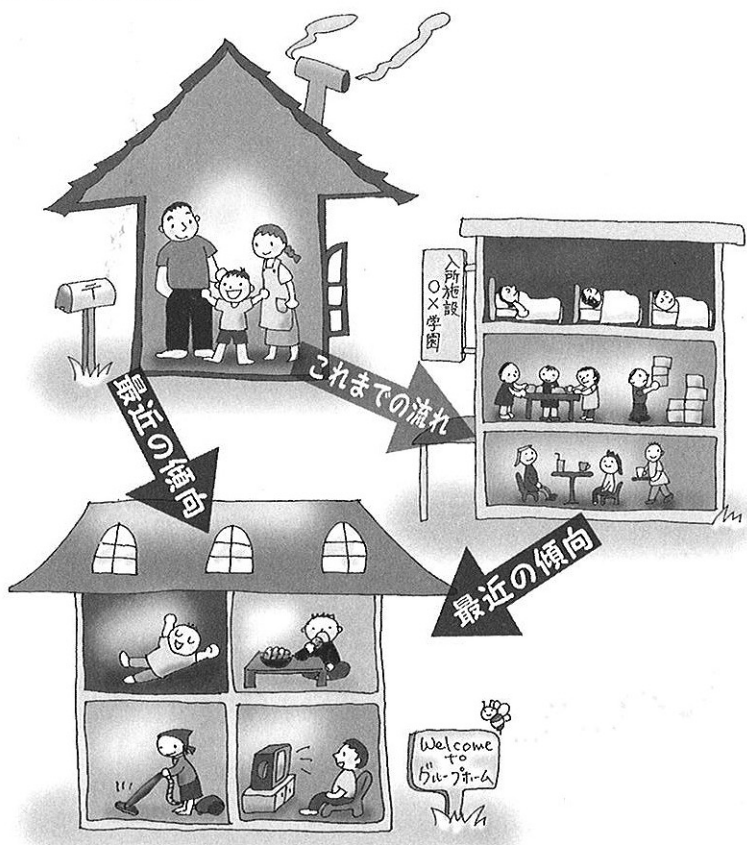
皆さんのサポートが、  
 必要です!

# 青年期・成人期の『くらしの場』

知的障害のある人も、一人の成人として、必要な支援を受けながら地域で暮らすようになってきました。

以前は、自分が住みなれた地域から離れた施設で暮らす方が多くいましたが、最近では、数人で暮らすグループホームやアパート等での自立した生活を望む方々が増えてきています。

こうした地域の住まいは、自治会の協力やグループホームの世話人さん・ボランティアさんの支えとともに、皆さんの理解により広がってきています。



地域の中のグループホーム等で暮らす方々には、それぞれに必要なとする支援があります。たとえば、金銭管理のお手伝いであったり、健康管理や毎日の食事の提供、対人関係や仲間づくりの支援などです。一人ひとりにとって必要な支援があれば、安心して地域で暮らすことができます。

また、経済的な自立ができるよう就労支援とともに障害基礎年金等の所得の保障があることで、将来の結婚についても可能となります。

あたりまえの生活を願う気持ちに変わりはありません。地域の皆さんの理解と協力をお願いします。



## 青年期・成人期の『趣味・余暇の場』

趣味をもつことや余暇の活用は、私たちの地域生活を豊かにし、生活に張りをもたらしめます。学齢期から続けてきたスポーツや表現・芸術活動など、さまざまな分野で、知的障害のある方々の活躍が見られるようになりました。さらには、社会福祉制度の改革で、支援者（ヘルパー）といっしょに外出をし、社会経験を広げる機会も増えてきました。



また、最近では、当事者団体としての本人活動も活発になりました。そこでは、自分たちでレクリエーション活動や交流会の企画・運営なども行っています。また、社会福祉制度等の学習会も開かれるようになりました。





# コラム

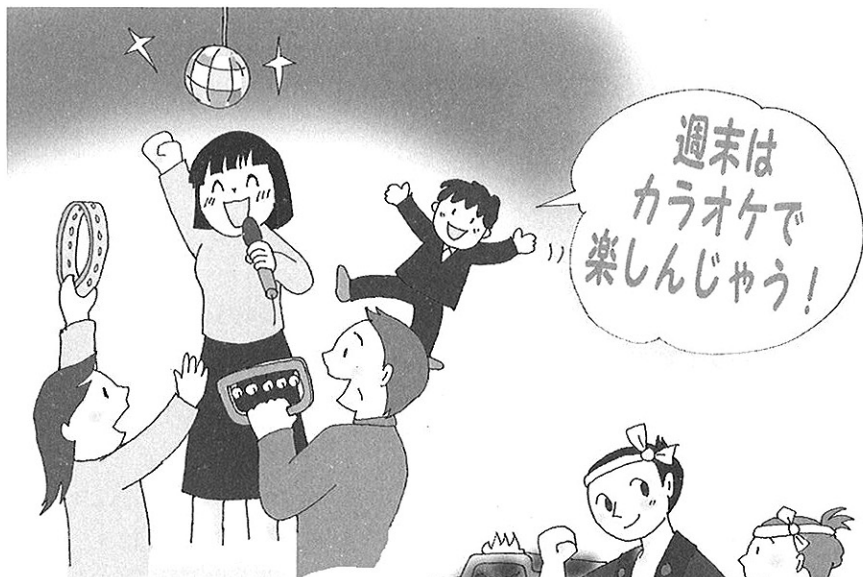
## 地域をつなぐ、人をつなぐボランティア！

地域生活の主要な場は、「働く場」「暮らしの場」「趣味・余暇の場」になりますが、それぞれの場をつなぐ温かな人間関係が必要です。

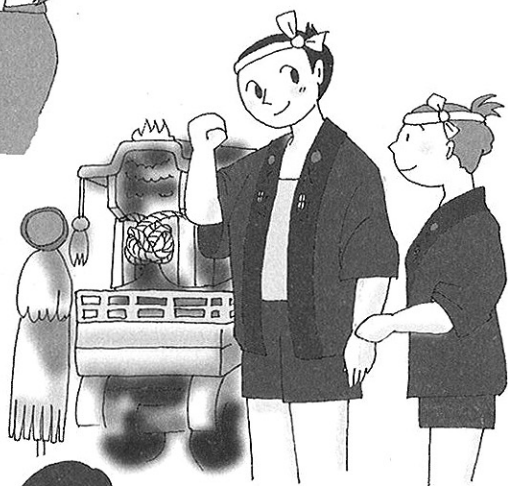
たとえば、仕事の帰りに、今日はちょっと一杯・・・という仲間や、カラオケにいっしょに出かけられる仲間がいたり、ときには、自治会主催のお祭りや清掃等、地域行事に参加できるよう声をかけていただくと、障害のある人も、きっと活躍できることがあります。

地域の中で、皆さんそれぞれが、ちょっとしたことをしていただくことで、障害のある人も安全に楽しく暮らせる地域になります。このような地域は、きっと誰にとっても暮らしやすいすてきな街なのです。





力を合わせて  
がんばろう!



ここで、ちょっとみなさんと考えてみたいのが……

## 障害ってなに？

みなさんは「障害」と聞いて何を思い浮かべますか？

「目が見えないこと」「耳が聞こえないこと」「歩けないこと」

きっと、「できないこと」「足りないこと」をまずは思うことでしょう。もちろん、これも「障害」の一つです。

でも、もう一つの意味をわかってください。それは「その人が感じる暮らしにくさのこと」。実はこれが「障害」の本体なんです。

たとえば、車いすの方が砂利道いっぱいの街に住んでいたとしたらどうでしょう。外に出ることもできず、なんとも暮らしにくさを感じます。この街ではその方とはたんに「障害のある人」です。

でも、スロープやエレベーターがある家や街ではどうでしょう。行きたいときに行きたい場所に行けたら、その人は不自由さを感じません。この方はこの街では「障害のある人」ではなくなるのです。

そうなんです。「障害」というのは、街や社会のあり方によって変わってくる相対的なものなのです。障害を重くするのも、軽くするのも、私たち社会のありようなんです。

# コラム

## 障害とは暮らしにくさ

1981年は国際障害者年でした。「これからは、障害のある人もない人も当たり前の市民生活を送ることができるような、ノーマライゼーション社会をつくろう」と世界中で訴えられました。そこでは「障害というのは、障害者個人のせいではない。障害とは暮らしにくさであって、それは社会の側がつかってしまうものなんだ」と考えるようになりました。

障害、つまり暮らしにくさには、いろんな暮らしにくさ（バリア）があります。たとえば、スロープやエレベーターがないなどの物理的環境的なバリア、あるいは駅の緊急放送が聴覚障害者には届かないというような情報的バリア、そして変な目でじろじろみることや理解のなさという心理的バリア。

障害のある人を「障害者」にしてしまうのは、私たち社会の責任。それに、障害のある人が暮らしやすい街というのは、実は高齢者にも障害のない人にも便利で優しい環境なのです。

この本では特に、見た目ではわかりにくい知的障害のある人にとって、暮らしにくさやバリアがどんなところにあるのか、どんな社会だったら障害を感じずにいられるのか、ぜひ皆さんにご理解いただきたいと思っています。

そして、よき隣の助っ人、サポーターになっていただけたら、とても素敵です。

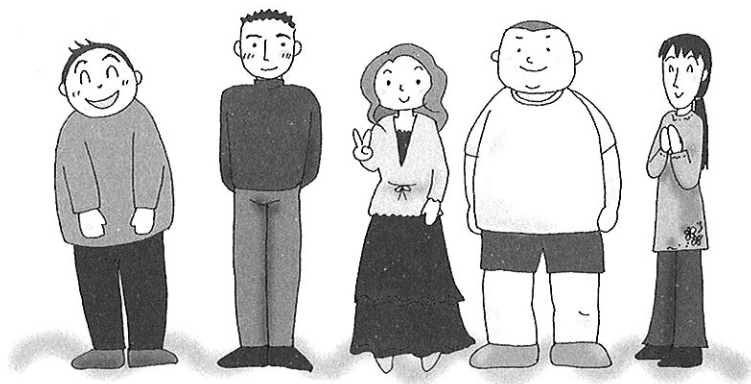
## 知的障害ってなに？

では、知的障害とはなんでしょう。どんな人をいうのでしょうか。

一つは、知的な作業をすることに苦手さがあります。言葉を使ったり記憶したり抽象的なことを考えたりすることです。人より時間がかかったり難しかったりします。

もう一つは、社会の仕組みや流れに上手に適應できないという苦手さもあります。仕事の手順をすぐ覚えたり、人とのやりとりに機敏に対応したりするのが難しいことがあります。

でも、知的障害だからまったくできないということではありません。一人ひとりに違いがあります。外見から見えないのでわかりにくいのですが、どうぞ同じ目線で話しかけてください。きっと一人ひとりの特徴が見えてくることと思います。



# コラム

## 社会人として自立

たつや君は、言葉があまり多くなく、知的機能の遅れがあります。でも彼は、小さいときから人とかかわるのが好きで、人付き合いもじょうず。近所のおばちゃんたちと楽しく会話ができて、愛される存在でした。仕事もゆっくりながら最後までやり遂げる持続力が十分ありました。

そんな彼が、実習をしたレストランの洗い場に社員として雇用されました。採用された理由はこうです。「洗い場の職場は忙しくて人間関係がときどきギスギスして困っていた」「そんな職場に、たつや君のようにニコニコした社員がいてくれると、なんとも皆が和やかになって、ゆっくりなたつや君の仕事を笑いながら手伝うことが増える」「結果、互いにさりげなく助け合い、全体として作業効率がよくなるんです」と。たつや君は洗い場のおばちゃんたちに「適応」し、職場に役に立ち、十分な収入を得たのです。

たつや君は知的障害、でしょうか？

最近の知的障害のとらえ方は、「知的機能の遅れと適応行動の制限、両方がある場合を知的障害という」というものです。つまり「知的機能に遅れがあっても、社会的適応に困難さがなければ、あえて知的障害とはいわない」のです。たつや君を取りまく「おばちゃんやレストランの経営者」という社会が、彼の作業の苦手さや暮らしにくさを取り除き、一人の社会人として役立ち自立させてくれた。つまり、たつや君はこの意味で、「障害のある人」ではない、のです。

もう一つ、考えてみませんか？

## じゃ、ひとりだち・自立ってなに？

1981年の国際障害者年から、障害概念がいろいろと変わってきました。「ひとりだち・自立をする」という考え方も変わりました。

私たちが「自立をする」というと、誰の助けも借りずに、自分でやる、ということを思いますね。朝一人で起きる、お弁当を自分でつくる、親のすねをかじらずに自分の給料ですべてやりくりする。つまり、「人の助けを借りない自立」です。

実は、もう一つ大事な考え方があります。それは「人の助けをたくさん借りる自立」です。

皆さんが骨折して動けなくなったとき、どうしますか？ 自分一人ではできないから、一人で歩ける1年後まで大好きな喫茶店に行くことをあきらめて暮らしますか？ あるいは、「ちょっと、ここだけ手を貸してほしい」と近くにいる人に頼んで、今飲みたいおいしいコーヒーを飲みに出かけたいですか？ きっと、できるなら出かけたいと思うことでしょう。「人の助けをたくさん借りて、自分らしい暮らしを生きる自立」です。

障害のある人の自立を考えると、この自立観が大切になります。

知的障害のある人も同じです。「言葉がうまく話せないけど、人と話したい。だから少し手伝ってください」「切符を一人で買うことが難しいけど、今日はディズニーランドに行きたい。だから少し切符を買うことをいっしょにやっていただけませんか」。

皆さんの「ここだけ少しの手伝い」があるだけで、彼らは彼らしい「ひとりだち」の暮らしができるのです。



ゴーン いく!

どの公園?  
これ?  
これ?

指定席の  
購入ですか?

うまい  
うまい



# どんな子ども・大人たちのなの？

知的障害のある子どもたちや大人たちには、自閉性障害をあわせてつな人もいます。

自閉性障害とは、「①他の人との社会的関係をもつことが苦手、②コミュニケーションをとることが苦手、③こだわりがあって限られた対象に強い関心をもちがち」という特徴をさします。よく誤解されるのは「親の育て方が悪かったから、愛情不足だから、心を閉ざしてしまった」ことに原因があるという考えですが、これは間違いです。知的障害と同じように、妊娠中や出産時、出生後ごく早期に何らかの障害のために脳の一部に障害が生じたのだらうと考えられています。

知的障害も自閉性障害も、どちらも発達の早い時期からの障害（発達障害）です。それぞれ一人の子ども・大人たちの特徴を言い表しています。たとえば、皆さんも「国語は苦手だけど、体育は得意」「人前で話すのは苦手だけど、事務仕事は早い」など、得手不得手がありますよね。知的障害や自閉性障害の人たちはその苦手さ得意さが、一人ひとり違っていたり、障害ゆえに私たちより苦手さが大きかったりするのです。

このために、彼らの言葉や行動の意味が人に伝わりにくかったり、誤解されることも実は少なくありません。ただ、当たり前ですが、一人ひとりの行動には、その場その場の意味があります。どうぞ、その意味を理解してください。

そして、もし街の中で出会ったら、「ここだけ少しの手伝い」を、お願いします。きっと、かかわっていただく中で、もっと彼らの行動の意味が伝わるはずです。

# 自閉性障害には、いろいろな特徴があります。 ～よくある例を紹介します～



# こんな行動にはこんな意味が… ～「ここだけ少し」の手伝いを！～

## ◎こちらのいってることが通じない？ コミュニケーションがうまくとれない、いわれたことを繰り返したいってけど？

－呼ばれても返事をしなかったり、大声を出したりすることがあるかもしれません。「ことば」だけで通じにくいときは、身ぶりや表情で伝えてみていただけませんか。あるいは絵カードや写真、実物を見せていただけると通じることがよくあります。聴覚的な情報（聞こえ）よりも視覚的情報（見える）のほうがわかりやすい人たちもいます。いろんな方法で伝えると、一番わかりやすい方法が見つかります。

資料：全国特殊学校長会作成のコミュニケーションボード  
ホームページ：<http://www.kyoyohin.org/>  
共用品推進機構 コミュニケーション支援用絵記号デザイン

## ◎ぴょんぴょんはねたり、不審に見える行動をとることがあるけど？

－うれしいときや嫌なとき、体を使って感情を表現することがあります。ぴょんぴょんはねたり体を揺すったりするのもその一つだったりします。不審に思わないでください。その場の雰囲気やその前に何があったのかによって意味があります。よく知っている親や支援者は行動の意味がわかることが多いですので、ぜひ声をかけてください。

## ◎なぜ、そんなにこだわるの？ いろんなものを集めたがるけど？

—自閉性障害のある人の中には、自分の好きな特定のものにこだわる場合があります。「洗剤」が好きでスーパーでボトルををずっと眺めていたり、つい並べ替える子。同じパッケージの箱がずらっと並んでいると幾何学的できれいに見えますよね。○や□など視覚的な情報にとっても関心が強いことがあります。あるいは「毎朝のバスのボクの席」にこだわる子もいます。自分の中にある行動のルールが途中でさえぎられると、落ち着かなくなるのです。

周りから見るとわかりにくいかもしれませんが、本人には必ず意味があります。「こだわり」は彼らの得意さの表れでもあります。「文字」に強い関心のある人が、パソコン入力能力を買われて就労していることもよくあるのですから。ぜひ寄り添って眺めていただけませんか。

## ◎「暗黙のルール」がわかりにくい？ 社会のルールが理解できない？

—列に割り込んでしまったり、危険なことがわかりにくく飛び出したりすることもあります。そのようなときは、どうぞゆっくり教えてください。彼らは生活の中で少しずつ学習していくのですから。

あるいは、その場のルールがわからなくて「パニック」になることもあるかもしれません。わからない不安やイライラがあったら、皆さんも混乱しますよね。パニックが落ち着くまで時間がかかることもあります。が、ゆっくり見守ってください。

